

博士論文要約

主婦を問い直した女性たち

—投稿誌『わいふ/Wife』の軌跡にみる戦後フェミニズム運動の一断面—

The Housewife Questioned:

The Trajectory of the Contribution Magazine “Waihu/Wife” as a

Feminist Movement in Post-War Japan

2019年4月25日

東京女子大学大学院人間科学研究科

池松玲子

1. 研究目的と研究対象

戦後日本社会では、高度経済成長期に多くの女性たちが無職の妻・母として家事・育児を担う主婦というあり方を受け入れ、それが女性の一般的なライフスタイルとして定着していた。ところが1970年代半ばからは育児終了期に「パート」として働く主婦の増加傾向がみられ、1990年代頃には家計補助のために就労する必要のない既婚女性が主婦専業でいるには言い訳が必要となるような状況が生じた。単にパート就労主婦が増加したというだけで、なぜ就労しない主婦は自らを正当化しなくてはならなかったのか。それは、主婦を就業に向かわせるこの間の政治・経済的状況とは別に、1950年代から断続的に起こったマスメディアにおける「主婦論争」、1970年代のウーマン・リブ、同じく70年代に起こった女性学等による主婦を問い直す動きがあったからである。

こうした動きはそれぞれにインパクトがあり、そのため主婦問い直しが問題意識として浮上し、女性たちに主婦を自明視せずその相対化を促すこととなった。社会が当然視し女性の多くも疑うことなく受け入れていた主婦ライフスタイルが、必ずしも女性の一般的なライフスタイルではないという状況へと変化したことは、家族の形から労働の場まで日本社会に多様な影響を及ぼすことになっていくが、では女性たちに「主婦を問う」態度がいかに伝えられたのかという点は十分に解明されているとはいえない。

「主婦を問う」とは主婦というあり方を自明視せずその状況を相対化し、「主婦でよいの

か」と女性自身が自己反省的な態度で自らに問うものである。仮に主婦というあり方を選択した女性であっても、自己反省的な視点を内在化することはありうるため、いわゆる「専業主婦」が減少したといったデータによりこれを明らかにできるわけではない。そのためか、問いかける動きはあったものの、そのインパクトが女性一般にいかにかに伝えられたかについては十分に解明されているとはいえない。

それを明らかにするには、主婦という状況下にある女性たちに訴えかけるような動きとはいかなるものだったのかを、個人レベルに近いところからみていく必要がある。そこで本論文では、こうした動きの中でも「主婦を相対化する当事者運動」にフォーカスし、政治・経済やマスメディア等のマクロな動きにはみえにくい現実の女性たちにアプローチ可能な投稿誌『わいふ/Wife』に着目した。この投稿誌をひとつの意味世界として多面的に研究することにより、草の根の女性たちに「主婦を問う」態度がいかにかに伝えられたのかを解明するのが本論文の目的である。

研究対象としての『わいふ/wife』は、1963年に「閉じこもりがちな主婦がつながりをもちたい」という目的の下に24歳の主婦によって創刊され、2度の編集長の交代を経て50数年後の現在（2019年）まで発行され続けている会員制（年間購読制）の投稿誌である。同誌のような小規模な言論の場において、いかなるメッセージがどう発せられ、メッセージを受けた女性たちがそれをどう受け止め、あるいは反発したのかをみていくことで、同誌が「主婦を問う」態度をいかにかに伝えていったのかを追った。

2. 論文の構成と各章の概要

本論文が依拠するデータは、編集部と会員へのインタビュー調査、会員対象のアンケート調査、創刊から現在までの『わいふ/Wife』誌および同誌編集部発行の書籍と新聞記事などを用いた資料調査によるものである。分析のために、まず編集長の2度の交代をもって、第1期（創刊1963 - 1975年）、第2期（1976 - 2006年）、第3期（2006 - 2019年現在）と同誌を期分けした。中でも会員が4000名を超えた最盛期第2期30年間を研究の中心とし、さらにこの期を助走期（1976 - 1979年）、拡大期（1980 - 1994年）、成熟期（1995 - 2006年1月まで）と3区分した。この3区分のそれぞれを、「人・活動・組織」と「誌面・内容・言説」という2つの視角から、同時に編集部と会員という視点から分析した。このように本論文は複数の分析視角をもちつつ基本的に時系列に構成されている。

序章で本論文の目的、問題意識、研究方法等を示し、主婦を相対化する当事者運動につい

での先行研究を検討した後に、第1章では研究対象としての『わいふ/Wife』について詳説し、同誌を同時代のミニコミ誌の中に位置づけた。その上で代表的な女性のミニコミ他誌と同誌を比較し、その独自性を明らかにすると共にこれを取り上げる意義を述べた。続く第2章では、同誌がどのようなメディアとして誕生したかを問い、第1期の同誌は同世代の主婦が生活の中の実践や関心事について書き／読みあってつながることを目的として創刊され、主婦の問題を個人で乗り越えようとした女性にとっては自立の契機となり、家庭に留まった女性には自らの思いを発信する場としての意味をもったことを示した。

研究の中心である第2期を分析対象としたのが第3章から第8章までである。まず、第3章と第4章は第2期の「助走期」(1976 - 1979年)を扱っている。第3章では助走期の「人・活動・組織」の視角から、第2期を担った編集長・副編集長は同誌に関わる以前から「主婦を問う」という問いに向き合っており、その後続く女性たちの先駆けといえる存在だったことを明らかにした。同時に、第2期開始当初は責任者不在の女性グループの限界が露呈した状況だったが、両名が中心となり徐々に同誌の方向性が定まっていたことも示された。その一方で第4章では同じく助走期の「誌面・内容・言説」の視角から同誌の主婦論争を分析して助走期では何が語られたのかを検討した。この論争では、編集部が会員に主婦の相対化を期待して、主婦の経済的自立の必要性を考える方向へと論争を誘導し、その結果、同誌主婦の近代的個人としての自立は経済的自立として語られ、全体としてこの論争は「養われる存在」という主婦観および経済に特定された自立観を伝えたことが明らかになった。

第5章と第6章は、第2期の「拡大期」(1980 - 1994年)を扱っている。第5章では拡大期の「人・活動・組織」視角から、この期の会員の急激な増加要因として浮かび上がった、①時代背景、②株式会社設立、③編集長・副編集長のパートナーシップと編集方針、④良い「書き手」が生まれるメカニズム、⑤主婦の再就職支援、⑥マスメディアによる注目という6点を分析した。その結果、これらの要因が相互に影響しあい相乗効果をもったことによって飛躍的に会員が増加し、それを基盤に同誌はフェミニズムとは距離を置く、いわゆる「普通の主婦」にも参加可能な間口の広いメディアとして形成されたことが明らかになった。他方第6章では拡大期の「誌面・内容・言説」視角から表紙・目次・広告を分析し、編集部が同誌を広範な主婦の共感が得られる一定程度メジャーな雑誌に近づけようと企図していたことを明らかにした。そうした方針に沿って、この期の主婦論争では異なる立場の主張が並列に提示され、あるいは会員の急増に伴う脱階層化によって得られた新鮮な投稿が積極的に掲載されるといった、多くの主婦の支持が期待できる構成になっていたことを示した。

第7章と第8章は、第2期の「成熟期」(1995 - 2006年)を扱っている。第7章では成熟期の「人・活動・組織」視角から、同誌編集発行という本来の活動以外の、書籍出版活動、『ファミ・ポリティク』発行、「老人ホーム情報センター」創設、「ニュー・マザリングシステム研究会」に焦点をあてた。分析の結果、これらの活動にはより広い読者に編集部と言説を届け、政治的発信を可能にし、介護の形を変え、母子密着育児問題に対処する等の、女性の政治活動と家族の問題に関わろうとする編集部の姿勢が明らかになった。対して第8章では成熟期の「誌面・内容・言説」視角から3件の主婦論争を分析したところ、1980年代の主婦優遇政策や「子どもの価値」をめぐって生じた助走期とは異なる対立が明らかになった。それは、編集部が「主婦ライフスタイルへの懐疑」と「主婦の経済的自立への支持」という一貫した姿勢を示しつつも、それに反する主張や異見も含めて多様な投稿を掲載し続けた結果、対立という形で議論が活発化したものであり、それをもって会員主婦に考えることを促したとみることが可能だった。

第9章では、第8章までの編集部を中心とした分析から会員主婦へと視点を移し、「主婦を問う」態度が「いかに伝わったか」を問い、具体的には同誌第2期最終号の特集投稿として掲載された38編の投稿および会員へのインタビュー調査結果を分析した。その結果、同誌は会員主婦にとってそれぞれ異なる意味をもち、それらの意味は「主婦を問う」という問いと密接に関わって、問いを受け止めるか抵抗するかといった点に差はあっても、多様な会員主婦に多様な回路をもって「主婦を問う」態度が伝わった可能性を示すものだったことが明らかになった。

以上を踏まえ、終章では「人・活動・組織」と「誌面・内容・言説」という2つの視角から得られた知見を、時系列に助走期、拡大期、成熟期の期ごとに整理しまとめた。そこからは、試行錯誤を重ねた多方面におよぶ活動による組織固めと、主婦論争を有効なツールとした誌上言論実践を両輪として、同誌は「主婦を問う」態度を伝える効果をもち、段階的にその可能性を広げていったことが明らかになった。それを元にさらに考察を加え、同誌は問いを伝えるために必要な多くの多様な女性たちを集めることと、その女性たちの日常生活の見直しにつながるような深い影響、この2点を両立させようとした、投稿誌というメディアを核とするフェミニズム運動と理解しうるものだったことを示した。各章の知見にみられた同誌のもついくつかの重要な特徴がその両立を支える要素となっていた。こうして、これまでフェミニズム運動としては注目されてこなかった投稿誌『わいふ/Wife』は、読者との相互行為の中で女性たちの変化を後押ししてきた存在だったことが明らかになった。同誌

は、フェミニズムの目的を明示的に掲げてはいないが、潜在的にフェミニズムの志向を含んでいる運動もフェミニズムとしてとらえる「広義のフェミニズム」の重要な動きのひとつであり、本論文では同誌を、社会にフェミニズムのメッセージを静かに浸透させた注目すべき運動と位置付けた。